

ラグビー部の歴史

山城 4 回 白波瀬 満

昨、平成十六年夏、OBクラブ主催の創部八十周年記念祭を現役部員も加わり執り行うことができた。出席者はその伝統の重みをそれぞれの胸に感懐を新たにしたことと思われる。

この京都の地には関東の慶応大学に次いで明治四〇年代、旧制三高に伝承され、それにつづき同志社中、京一中（洛北高）、大正に入り京一商（西京高）、と他の地に先んじてラグビーが芽生えていたようである。三中でも同年はじめ頃、英語教師シンクレア先生が生徒にラグビーを教え、校庭にはゴールポストが建てられていた。第五回卒の名和野秀男氏が早大のラグビー部創立に参加、また第九回卒の石沢誠之助氏が、大正十一年十一月の第一回早慶戦にHBとして活躍されている。京大、東大の創部もこの頃である。三中ラグビー部創部当時には相前後して大阪天王寺中、北野中、神戸一中、天理中、秋田工、九州の修猷館などが呱呱の声をあげつつあった。

以下我がラグビー部の沿革をたどってみることにする。

創部 大正十三年四月

京都府立京都第三中学校ラグビー蹴球部創設 ユニフォームは
木綿白無地で襟のないものであった。

翌十四年一月、第八回日本蹴球大会に出場

昭和四年 第十一回全国中等学校ラグビー大会に出場 ユ

ニフォームはグレイと紺の縞

この頃から校内大会隆盛、一クラス、一チーム、全校二十チームが優勝を争ったと云う。主たる対外試合には全校挙げての応援で「いでや歌いてともに舞え」の応援歌がグラウンドに鳴り響いた。これは当時の三中独特の文武両道、質実剛健の校風がそういった雰囲気を感じ出したのかもしれない。この時代、創部から数年、充実した部活動へと発展移行した時期でもあり、特に当時、日本一だった京大ラグビー部の三島、足立、野田、岩前各氏を中心とした同部員の熱心なコーチ、指導によって本格的な体制としてのラグビー部の基礎固めが確立されたと見てよい。それはラグビーの持つ特性（特殊性か）、理論に裏付けされたヨーロッパの技術はもちろん、その思考性、精神性、つまり、常に激しいコンタクト（接触）プレイが要求されるが故に、フェアプレー、セントルマンシップ、ノーサイド等々が限りなく求められる所以であるなど、徹底的に教え込まれたと聞く。この時の三中部員、日置、野上、米草達は京大のグラウンド

やその部員の下宿先にまで赴き教えを乞うたと云う。後述するが、その後三中出身者によって、早大をはじめ大学、高専などで活躍した多くの名選手を輩出することになるが、この時代に育まれたこれらの功績を決して忘れてはなるまい。この機会にこの時のコーチングのラグビー十則のうち、以下、いくつかを書き留めておくことにする・・・これがラグビーの神髄か！

1 Rugger Man is a Gentleman

2 Always on move

Always on the Ball

With Anticipation

Without Hesitation

Attack is the Best Form Defense

Tackle is the Best Form of Attack

.....

.....

この年度の部員

日置、野上、田畑、池田、林、渡辺（米）、荒木、福地、小寺、
米華、菱田、渡部、初鹿野、世古口、唐畑、寺岡、渡辺（泰）、
藤井、松村、北口・・・・・・

昭和八年、京三中ラグビー部OB倶楽部成立、初代会長塚本
庸之助氏

昭和九年、ラグビー部十周年記念誌「我らが部史」が編集発行さる。

昭和十年、第十七回全国中等学校ラグビー大会に出場 ユニフォームは白、襟が紺、ストッキングは紺地に折り返しが白、(現在もこれが山城ラグビー部の正規のユニフォームとして引き継がれている)。

昭和六年から十二年にかけて三中出身者が戦前の早稲田の黄金期を築いた主力的な存在であったと聞く。三中出身者で十年の野上に続き十一年の米華(ともに全日本選手)が主将を務めた時代もあり他に日置、渡辺、池田、林、佐古田、松本、布村、今沢等々、その後も三中からは毎年一、二名が早稲田に進学し、活躍した経緯がある。

ここで特記しておきたいことは十一年の東西対抗(学生)のメンバーに七人の三中出身者が占め、関東から米華、林、池田(早稲田)、関西からは飯田、渡辺、久保、寺島(同志社)が選抜された。当時は東西対抗試合に選抜されることが全日本メンバーへの登竜門として学生ラグーマン達が大いに競いあったもので一中学の出身者から七人の代表者が選ばれるということは希有なことであった。

昭和十五年十一月 対同志社中戦でそのゲーム中、重傷を負いそれが原因で夭折した松本真君の京三中学友会主催の慰霊祭

が生徒控室で行われ、京三中ラグビー部、同OB倶楽部による追悼集「散華」を編集して霊前に捧ぐ、

昭和十六年 この年の全日本メンバーに三中出身の布村、今沢（ともに早大）の二名が選ばれた記録がある。

昭和十七年、第二十四回全国中等学校ラグビー大会に出場

昭和十八、十九年は大戦中のため部活動はほとんど休止

昭和二十年八月終戦、九月より部活動復活、再建へと現役部員とOB倶楽部立ち上がる。十一月二十五日、戦後の初戦を京大グラウンドで同志社中学と行う。

昭和二十一年、全国大会京都地区決勝 対京一中戦 九―六にて勝ち近畿大会京都代表（橿原神宮）準決勝で大阪代表四条畷中に負ける

昭和二十二年、全国大会京都予選で同志社中、五中等々破り京都代表として西宮に出場したが（当時は近畿一校の出場枠しかなかった。）これも前年同様準決勝で敗退。

昭和二十三年、学制改革 府立山城高等学校に改称、この八月 戦後初めての夏合宿を京都高専グラウンドで行う。鐘紡高野寮を借り、自炊、各自米持参、不足分は野上一郎先輩よりの寄附、戦後の食糧難、物資不足は深刻だった。主たるコーチは布村、鈴木、野上（久）、坂林、林（秀）・・・の各OB

京都地区決勝、山城十四―三西京高 国体近畿大会京都代表

（花園）

昭和二十四年、この年の夏合宿から京大農学部グラウンドで行う。一人、一日米六合、昨年度の参加OBの他、笹井、清水、立石、高田、萩原等、東西大学の現役、OB多数参加。

この年の全日本メンバーに三中OBの林（秀）早大、萩原（文）同志社が選ばれている、ともに全関東、全関西のメンバー

国体京都地区決勝 対鴨沂高校戦 十七―五にて勝ち近畿予選京都代表として花園に出場、淀川工、芦屋高を破り決勝へ進出、対村野工（兵庫代表）、雨中戦となり、前半〇―〇の大接戦、後半、主将のSO谷口が鎖骨骨折のため退場、勝てる試合を落とす。（村野工は全国制覇）

この時の出場メンバー

FW 西郷、柴田、青木、植木、安本、衛藤、貴志、伊東、

HB 河合、谷口

TB 橋本、稲垣、白波瀬、芝

FB 高橋

昭和二十五年、京三中、山城高OB倶楽部、二代目会長に野村栄一氏就任、

昭和二十六年、国体、全国大会ともに京都予選決勝で敗れ去る。

この年、名門京大ラグビー部創立三十周年祭に鴨沂高（旧一

中」とともに招待される。この時代、京大チームは強豪の一角にあり、その主力メンバーは京一中、三中で占める。この年度の三中出身者、梅村、森、沢村、林口、眞継、笹井（義）、谷口（雄）、西郷・・・等

昭和二十三年より約十年間、顧問横山正幸先生、同三十九年よりの顧問、辻馨先生の時代が続く、一時、ラグビー部が衰退し存続が危ぶまれた時、「伝統の部を何とか」と支えてくれた辻先生の功績は大きい。

昭和三十八年 山城十四回松山均、同志社が全日本選手権で近鉄を破り王座についた時のロック、全関西FW、当時、強豪と云われた京都市役所チームの中心的存在だった。

昭和四十一年 東京遠征、早稲田高等学院と日比谷高等学校と対戦す。

昭和四十三年 東京遠征、早稲田実業と日比谷高等学校と対戦す。

昭和四十四年 日置寧二氏三代目OB会長に就任。

昭和四十五年、東京遠征、早稲田実業と対戦、これが定期戦の起点となり、東京、京都を毎年交互に遠征試合を行い現在に継承されている。平成十七年で三十四回を迎える。

昭和四十八年、京三中、山城高ラグビー関係者四十九名の合祀慰霊祭を催す。遺族、来賓、OB、現役部員、約百名が、母

校体育館に集い、それぞれの冥福を祈った。

昭和四十九年 同体育館において創部五十周年記念祭を来賓、OB、現役部員併せて百名余りが集まり盛大にこの祭典を祝うことができた。

昭和五十年 京三中、山城高ラグビー部五十年誌（ROBクラブ編）発行さる。この年、布村清一氏、四代目OB会長、その後、OB会長には橋本年弘から山城出身者になり、竹口義之、小寺智之と引き継がれ現在にいたっている。

創部以来、八十年をすぎた今、その間の部活動、OB会の継承には幾度かの栄枯盛衰はあったが、中絶することなく連綿と続けられてきたことは誠に喜ばしくめでたいと云う他はない。現在の顧問、西村先生の現役指導、OB会運営は山城二十七回の小寺会長を中心とした組織力に期待したい。平成十年頃、鹿屋体大から山城高に赴任、ラグビー部部長に就任した井上先生は着任後二、三年でベスト8の常連になるまでに育て上げ、部員数も嘗て無かった六十人を超える時期もあり、彼の洛北高への転出は我々にとって残念な出来事の一つでもあった。

ただ、三中時代、それに山城高に改称後の数年の戦績を含め、幾多の誇り得る選手を輩出した輝かしき歴史を思うと、その後、今日に至るまで、部活動の内容には一抹の淋しさを禁じ得ない。栄光が再び山城のグラウンドに蘇ることを願うや切である。この

稿を書くに及んで旧制三中から新制山城時代の改革期に在籍した一人として前述した旧制三中独特の雰囲気・・・重複するが文武両道、質実剛健のムードが新制高時代に入り年を追うことに欠落、これは一般的な戦後の事象とは云え、その辺りに弱体化の要因が潜んでいる様に思えてならない。少々、時代錯誤、偏見の見方かもしれぬが・・・。

ここに世界的な天才プレーヤーとしてその名をほしいままにした二人のOBのことを特筆してこの稿を終えることにする。

三中二十一回 野上一郎 以下、ラグビーマガジン社刊「日本ラグビー物語」より抜粋 “名選手とは誰か” 野上の存在は近代化した早大ラグビーの基礎を創ったといってもよい、それほど彼は、理論だけでなく、プレーを通じて早大ラグビーの改良に貢献した名選手の一人である。（中略）恵まれない小軀をもって、正確なハンドリング、左右平等に利かすキック、ゲームの進行に対する鋭い「読み」。その読みから敏速な回り方など彼の名選手たる本領があった。早大の生んだ名選手の一人として忘れてはならぬ人である。（後略）

“名選手のフェアプレイ” 昭和十一年、全日本対ニュージーランド戦の時、野上が敢然とドロップゴールを試みたが、ボールはゴールポストの上を高く上がったため、バーを超えたかど

うかの判断を一瞬、レフリーが躊躇ったとき、キッカー本人の野上が自ら大声で「ノーゴール、ノーゴール」とレフリーに告げた。本人の意思表示をレフリーは尊重しドロップアウトを宣した（中略）このようにキッカー自身が進んで「ノーゴール」を告げるということは、プレイヤーの本分であるフェアな気持ちを常々抱いていなければ出来るものではない。このゴールが成功していれば逆転のチャンスでもあった。（後略）後に、このことが日本ユネスコ協会第一回国際フェアプレイ賞（一九六三年）に輝き、亡き本人に変わりご夫人が受賞された・・・平成元年七月十日付朝日新聞による・・・

山城2回 谷口進一郎 昭和二十四年度主将、当時はスタン・ドオフ、高校在籍当時よりその天才的なゲームでの働きは常に超高校級と謳われ、ラグビー界は勿論、世間からも注目を浴びる存在であった。昭和二十五年、早大一年からレギュラー、全九州を破り、全国制覇、以下、岩波新書「ラグビー荒ぶる魂」大西鉄之助」著から抜粋。

「それは天才的な選手で早稲田の一年のシーズンが過ぎ全関東に選ばれた後、結核に罹り夭折。戦前の早大からも幾多の名選手を輩出してきたが、（中略）彼があのまま、プレイを続けていたら戦後を代表するCTB十三番になっていたであろう。彼がもし生きていたら、早稲田のラグビーは変わっていたと

思う。将来、早稲田のコーチでもやっていたら、一生、先生でもやっていたら、あれだけの天才が教えていたら、すばらしいラグビーができたのではないかと思うのですが（後略）・・・」早稲田は彼の死を悼み背番号十三番を暫くの間、欠番にしてその冥福を祈った。

翌、翌々年と、英国名門チーム、ケンブリッジ、オックスフォード大が来朝、その時、関係者達の「彼が生きていたら」と云う嘆息めいた声を幾度聞かされたことか・・・

